

キリスト者井伊誠一と下越農民と私

94K100 佐藤 浩 雄

1. 私とキリスト教との出会い、井伊誠一先生その人間像

私は、20才台の青年の頃、井伊誠一先生と出会った。

既に、政治の第一線を退いて数年たち、体の老化が目立ち、歩き始めると足が止まらない。でも自分の後継者の選挙が、自分の選挙よりも心配で家にいられ無いのだと奥様が話しているのを覚えている。井伊誠一先生は選挙事務所にきて話しをするわけでもなく、事務所を眺め、農民からの挨拶を受けられていた。私は、ああこの方が「農民の父、神様」と尊敬される井伊誠一先生なのか、こんなにお年を召しても自分の後継者の事を心配されておられるのだな、とその人間愛の深さに感激していたものだった。そして井伊誠一先生は、演説会では「平和憲法」の話しかしない人であったこと、「民主選挙は皆に推されて出るもの」との固い信念から自分の選挙では一度もお願いしますと言って頭を下げたことのない人であるが、自分の後継者の選挙では「お願いします」と言って頭を下げていること、新潟へ弁護に行くのに、汽車賃が無くて門に立たずんでいたことなど、井伊誠一先生の並外れていた清貧さ、私利、私欲の全く無かった人である事を示すエピソードを農民から沢山教えて頂いた。余りのスケールの大きさに只々驚き、当時の若い私には理解出来ず、何でそんな事ができるのか分からなく、ただ「偉い人」なんだなと感心をしていたものであった。

1985年1月5日厳しい寒さの中、井伊誠一先生は92才で亡くなられ、葬儀のお手伝いをした。新発田教会の葬儀は極めて質素な中にも、厳かに、香典はお受けせず、人間井伊誠一の歴史が牧師によって語られ、井伊誠一先生を慕う農民、市民の悲しみと愛情が滲み出る葬儀であった。私はキリスト教による葬儀の雰囲気と分かりやすい牧師のお話の中に、「農民の父、神様」と尊敬される井伊誠一先生はキリスト教の人間愛と密接不可分である様な気がして、それが私のキリスト教との出会いであった。

2. 木崎争議と井伊誠一先生

井伊誠一先生は1892年10月5日新潟県北蒲原郡川東村板山（現在の新発田市川東板山）に生まれ、新発田中学校・第二高等学校をへて1919年東京帝国大学法学部を卒業。民間会社に勤めた後、1922年帰郷して弁護士を開業した。1922年12月新潟県北蒲原郡加治川村の小作農民が二重俵装の強制と検査用米＝余米3升の軽減を求めて加治川村中川小学校で集会を開いたところ、多数の検束、起訴者を出し、法廷闘争に発展、井伊誠一先生は、片山哲、三輪寿壮らとその弁護を引き受け、無罪を勝ち取るようになった。1922年11月23日、日本を震撼させた「木崎争議」の端緒となった笠柳横井小作組合が結成された。対地主減免二割を要求し立ち上がった。この要求にほとんどの地主は要求を入れたが、真島家のみが拒否、逆に新発田裁判所に小作料支払

いの請求訴訟を起こし、裁判となった。井伊誠一先生は木崎農民の要請に応え、キリスト者、片山哲、三輪寿壯と共に弁護を引き受けた。当時の下越は日本最大の地主に支配され、小作は泥田の虫以下の生活で、その農家の殆どが小作であった。従って小作農民の弁護をする弁護士は新潟県には一人もおらず、井伊誠一先生一人であった。その後「木崎争議」は地主の農地明け渡し請求を裁判所が口頭弁論なしに認めたため、抗議した組合長の息子が割腹するなど、大きな社会問題となり、時の内閣の閣議に何度もかかるほどの重大な社会的影響を与える事件に発展、農民との対立が深まった。1925年農地の明け渡しを求める仮執行を行う警察官と農地を守る農民が木崎村各地で衝突。多数の検束者を出した。農民の要求は次第に農村の民主化を求め小作農民代表の区長を選出したり、農民の為の教育を求め、ついに農民の子弟を自ら教育するため二階建て108坪ライト式の「無産農民学校」を建設。同盟休校していた子供を収容、全国から支援の教師が参加した。この「無産農民学校」の建設にはキリスト教青年会大工ギルド武藤福次郎が棟梁として東京より参加、村の大工を指揮して献身的な努力をする。キリスト者の賀川豊彦も建設を応援、竣工の日、病気の為欠席、熱烈な手紙を送っている。「無産農民学校」の竣工式には、近郷近在の農民数万が集まったと記録されている。その後木崎村各地で集会を開き、最後の集会場の松浜会場へ向かう農民と警察官が衝突、指導者には多くの逮捕者を出した。これが有名な久平橋事件である。この他に木崎争議には全国から沢山のキリスト者が参加している。井伊誠一先生の清廉、高潔な人柄は庶民に広く畏敬された。そして小作争議の弁護をする傍ら農民の代表として1927年県議会議員となり、廃娼運動の先頭に立ち、1929年12月通常県会に上程された「廃娼決議案」で、井伊誠一先生は県政史上に残る名演説を行い、公娼制度の悲惨さを訴えた。井伊誠一先生の活躍で実に40年の歳月を費やして娼廃案は県会を通じたのである。この様に深い人間愛に導かれた活動で農民や市民に感動を与えている。その結果、井伊宗と言われる熱心な支持者を作り出した。

また戦中は体制翼賛会全盛の時代であったが、体制翼賛会の推薦無しで衆議院議員選挙に立候補し残念ながら落選している。戦後衆議院議員に七回当選、その間落選中の三宅正一を自分の身替りとして立候補させ、自分が選挙責任者となって衆議院議員に送るなど、日本政治の中で議席を譲る議員など現在まで無く、まして世襲の代議士の多い今日では考えられないほどの仲間に対する深い愛情を示された。これらは政争に明け暮れる今日の政治家が教訓とすべきことである。人生を弱きもの、小作農民の為にすべてを捧げた。私が見た先生は、いつも静かで、柔和で、大きな声一つ出さず、ニコニコしている先生であった。演説はいつも憲法の話で、上手では無かったようで、奥様が立会い演説会に代理で出ていた話をよく聞いている。奥様の演説は、何度も聞いているが我々に勇気を与える素晴らしいものであった。

また、井伊誠一先生は、早くから俳句を趣味とし、松城と号した俳人で、戦前『郷土』同人として、新発田の文化運動に関わっている。

私からすると、井伊誠一先生は偉大なヒューマニストであった。

3. 限りない農民への愛情とキリスト教人道主義者井伊誠一先生

井伊誠一先生はある農民に、「私は木崎争議に弁護士として小作農民の側に立たなかつたら、私の人生は全く反対の方向へ進んでいたかもしれない。木崎農民の拙宅訪問は私の人生の分岐点だった」と話している。この一瞬の出会いに人生を掛けられるのは深い人間愛に根ざした先

生の信念によるものだと思う。

また、井伊誠一先生の1947年5月の備忘ノートに、

1. 新発田市民に慧智と品位を与えるために、学校を起こしたい。
2. 教会と幼稚園とを成長させたい。
3. 図書館利用上の改革を加えたい。
4. 市全体を清潔な文化都市に改造したい。
5. 青年に希望の道をひらき、市会を若返らせたい。

とある。これは、先生の公私におけるいくつかの職責（例えば、弁護士として、衆議院議員として、教会の信徒として）に対する自己の信条、目標を書き記したものと理解されている。

この5項目は井伊誠一先生がキリスト教人道主義者である事を、余すこと無く示している。1項目にも関連するが、今日の敬和学園大学の存在は、井伊誠一先生の願いでもあったことが分かる。

いずれにせよ井伊誠一先生が敬虔なクリスチャンであり、思想の根底にキリスト教が在ったのは、間違いないところだ。

井伊誠一先生は、多忙な公務にあっても新発田教会の日曜学校を主催して来られている。1947年5月の信条においても、まず「教会生活に就いて」をあげ、「常に信徒の当否を問うことを」自己に課している。

人間の扱いを受けておられない小作農民に対する限り無い愛情、小作農民の子供に対する「無産農民学校」の建設への情熱の根源は、キリスト教人道主義であり、政治家としてのよって立つ思想基盤はキリスト教人道主義者であった。

4. キリスト教人道主義者井伊誠一先生の生き方に学ぶ

私は今、敬和学園大学でキリスト教を学んでいるが、あまり良く分からないことがある。ただ直接触れ合ったことのあるキリスト者は、私にとって感動を与えてくれる人が多い。井伊誠一先生と奥様は取り分け強い印象を与えている。

聖書を読むと、大変わかりやすい。例えばコロサイの信徒への手紙『日々新たにされて』3章12節には、「憐れみの心、慈愛、謙遜、柔和、寛容を身に着けなさい。互いに忍び合い、責めるときがあっても、赦し合いなさい、主があなたがたを赦してくださったように、あなたも同じ様にしなさい。これら全てに加えて、愛を身に着けなさい。愛は全てを完成させる絆です。」と私たち人間の生き方、心の在り方が分かり易く書いてある。マルコによる福音書にイエスの活躍、「民衆と共に歩むイエス」が書いてあり、イエスが、病気を治したり、悪霊を払ったり、パンを与えたりする場面がある。ヨハネによる福音書のイエスとサマリヤの女や、五人のマリヤの活躍は人間の平等、弱きもの、女性に対する人間的な取扱い、差別の禁止を教えているものではないのか。キリスト者は毎日聖書を読み、心を一瞬静めることにより、反省し、弱い自己と対決し自己改革を進めているのかもしれない。現代社会に於ける、あらゆる分野の指導的立場に属する人間のあるべき姿、人間のあるべき姿を教えているのだと思う。

井伊誠一先生は、戦前の無権利状態の農民、取り分け虫けら以下の生活に追い込まれていた小作農民の弁護を新潟県でただ一人行い、農民の生命であった農地の取り上げと戦った。その愛情、勇気、心と姿に、何十万の小作農民が勇気づけられたであろう。「父、神」と尊敬する

のは当たり前かもしれない。戦後、農地は解放されたが、日本で最も解放が徹底されたのは新潟県下越といわれ、農業課税が最も軽いのは下越といわれているのは、戦前の農民運動のお陰であり、井伊誠一先生のお陰だと思う。そこには常に威張らず、静かで、私利私欲を否定し、体制翼賛会の推薦無しで衆議院議員選挙を戦い、仲間の為に命を掛け、自分の衆議院議員の議席さえも譲る、人間井伊誠一先生がいたのだ。今日、飽食と浪費の中で、環境と地球の破滅をもたらそうとしているのは、人間の傲慢ではないのか。キリスト教人道主義者井伊誠一先生の存在と生き方こそ、私が学ぶべき事である。

〈参考文献〉

- 三宅正一著『幾山河を越えて』
沼田政次著『棒の木のうた』
小柴郁三著『木崎騒動と攻防の人々』
北蒲原農民運動史編纂会委員長 井伊誠一著『木崎争議日誌抄』
川瀬新蔵著『木崎農民運動史』
木崎村小作争議60周年記念事業実行委員会『木崎村小作争議60周年記念誌』
荻野正博著『新発田郷土誌』第15号「井伊誠一文書のこと」
荻野正博著『杉原の群像』
『日本社会運動人名辞典』青木書店
『新発田市史 下巻』478ページ
『新潟県人物総覧』
新共同訳 聖書